價値(ヴァリュー)を描出するに勤めなければならない。

自然の色彩を研究するには、純白の紙と濕製繪具を以て、大に注意して常に大きく描くにある。ヘードン氏の自叙傳に肖像畫に就ていふて居ることが、風景畫にも利益あることであるから左に拔萃する『常に大畫に筆を振ふて居たものは常に小畫をのみ描いて居るものよりは、小畫を描いても力量が優つて居るものである。大作で部分的の研究が出來て居れば小畫の全體は容易なる理である。大作家が小畫を描くにはその智識を壓するのであるが、小作家の大作をするのは、その智識を擴張するのである。ルーベンスが小作その他諸名家の小作が皆秀逸なのはこの理に外ならぬのである。』

自然を模寫する目的で興味ある研究をしやうといふには、スケツチの裏か、手帳へと、覺書をして置く習慣をつけるがよろしい。この覺書は形、色、或はエフエクトの或特性を手早く明確に、しかも簡畧に寫すのである。かくして置くと後に至りて、鉛筆や彩筆で不完全に描いてある處に明な說明を得るので、大いなる補助を得るのである。また手帳の用は、畫題の組立(コンポジション)を數線で描いて置き、または光部と陰所を手早く記して置く必要がある。

(此項完)

月

朧月は春のもので、山中に見るよりは里の方がよく調和する。靜かな漁村、柳三四本の河畔、等が趣が深いのである。夏の月は涼にあるので、夕立の晴れたあと、木の葉、草の葉にある雫に月の光が映つてきらめく時は、いひしらぬ涼しさを覺える。仲秋の月は澄めるを貴び、冬の月はもの凄いのである。

月と調和する樹木は、松(滿月)、櫻(霄月)、柳(新月)、杉林(半月)、冬木立(三日月)(明けの月)

〔丸山晩霞氏、女性と趣味〕